

成 重 木 鈴

天草・島原一揆で荒廃した天草の復興を、幕府から託された鈴木重成代官。重成は仁政を礎とした行政に着手した。

そしてその期待に応え 能力・手腕を発揮し、天草復興に全力を捧ぐ。

行政基盤や定浦制の整備、石高半減への努力等々、その仕業は多岐に渡る。

重成は民心安定のため、兄禅僧正三和尚の協力を仰ぎ、

寺社の建立による仏教の普及に努める。

さらに一揆の犠牲者を供養する首塚の建立を行う。

だが重成、天草復興道半ばにして、病に倒れる。

これらは二代目養子鈴木重辰代官に引き継がれる。

後世の民は鈴木重成・重辰・正三を神として祀る。しげとき

それが島内各地に建つ鈴木さまだ。

神として祀られた重成は石高半減を死を賭して請願したとされるが。

病死が真実であることは史料によっても間違いない。

ただし病死であろうと重成の功績の輝きは失われない。

◇ 目次 ◇

鈴木重成の事績と考察

3

鈴木重成 天草代官就任までの経緯
亡所開発仕置き
行政基盤の整備と移民導入
年貢の軽減策
遠見番と烽火場の設置
定浦制度
寺社の建立
重成建立の寺社
寺の特徴
「鈴木さま」一考察
自刃説に対する考察

8

鈴木重成関係年譜

12

鈴木重成関係史跡

14

鈴木重成公供養碑
鈴木神社と鈴木明神伝碑
鈴木重成像
鈴木重成公病即消滅祈願の石灯籠
阿弥陀如来と二十五菩薩
富岡吉利支丹供養碑

参考資料

鈴木重成関連資料

22

天草各村の石高変化
楠浦村における石高半減前後の
年貢収納率及び年貢率
定浦の変遷
寺社領

鈴木重成の事績と考察

鈴木重成 天草代官就任まで

鈴木重成は、天正十六年（1588）、三河国加茂郡足助庄則定（愛知県）に生れた。父は重次、徳川に仕えていた。足助は、現在豊田市に編入されているが、紅葉が素晴らしい香風溪がある。

時は豊臣政権絶頂期で、徳川家康が関東に移封されたのは、翌々年の天正十八年のことである。したがって、鈴木家も下総（千葉県）に移住する。

重成は、通称を三郎九郎と称した。

重成には、長兄重三（正三）を始め3人の男子の兄弟がいた。重成は三子であった。後に、天草代官となった重成は、仏教普及に正三の助力を仰ぐことになるが、正三とは9歳違いであった。

関東に移住して10年後、関ヶ原の戦いが起きた。重成12歳の時である。重成の父、重次はこの戦いに参戦している。この戦いに勝利した家康は、重次に加茂郡の内五百石を与えた。また、21歳の長兄重三は、本多正信に従い、この戦いに参戦するも、信州上田で真田勢に足止めされ、関ヶ原の戦いには、直接は参戦していない。

そして、慶長十九年（1614）大坂の陣が起き、鈴木4兄弟は揃って従軍する。

戦後、家康は4兄弟に加茂郡の内それぞれ二百石を与えた。重成に与えられたのは、御蔵村、摺村の二百石であった。冬の陣の後、豊臣が滅亡する大坂夏の陣が起きるが、重成はこの戦いには参戦していないようだが、この年に、家康に仕えることになる。

翌元和二年、家康が死去し、重成は秀忠に仕える。そのため江戸の駿河

台に移る。

早くから禅を学んでいた兄重三は、元和六年、出家し仏門に入り正三を名乗る。41歳であった。この正三の出家により、重成が鈴木を継ぐことになる。

天草では、勿論代官重成が有名であるが、全国的には、正三はただの禅僧としてではなく、思想家としても著名である。

重成が天草代官に任ぜられたのは、寛永十八年（1641）で、死去する承応二年（1653）まで12年間代官職を務めた。

以下それまでの事績を箇条書きにまとめてみよう。

寛永十四年（1637）、天草島原の乱に松平伊豆守のもとに鉄砲奉行として従軍、武功をたてる。

翌十五年、乱が終結すると、松平伊豆守に命じられ、この乱による島原の荒廃立て直しのため、島原に残つてその復興策を検討する。

さらに翌年には、天草の復興策検討のため天草来島。これらは、重成の行政手腕を、松平伊豆が高く買っていた証左である、重成は、見事その任を全うすることになる。これは、残された天草島民にとっても、最大の幸せと言うべきであろう。

寛永十八年（1641）、天草は寺沢氏から召し上げられ、山崎家治に与えられた。しかし、家治は、復興策よりも城普請に一生懸命で、政治にまで手が回らなかった。一介の大名に天草復興は荷が重かったこともあり、天草は天領となる。

その初代代官に鈴木重成が任ぜられる事は、乱後、島原天草に残り、復興策を建策した有能を認められ、当然のことであった。

さて、鈴木重成没後360余年後の今日でも、島民から神として崇められているが、果たして、重成の事績は、実際はいかほどのものであったか。というのは、がんじがらめの徳川封建制度下で、地方代官にどれほどの

権限があったのだろうかという疑問があるからだ。

よくテレビドラマなどで、悪代官なる者が登場する。それは、地元の悪徳商人と手を組んで、自らの利を得るために、悪政を行うというもの。

確かに、何時の世も、そういう輩はいるものだが、果たして数多かったものか疑問がある。厳しいはずの徳川政権下で、そのようなものはドラマだけの世界と思う。

それを逆に言うと、代官の一存で、年貢を軽減したりすることができたのか。それは不可能なことだと思う。

ただ、言えることは、その献策をすることは可能であろう。ただし、それが受け入れられるという保証はない。

ただその献策を行うか否かが、代官の質になる。

鈴木重成は、天草代官以前に、そのような職（上方代官）に就いていたこともあり、庶民の厳しい暮らしを知っていたことで、亡所と化した天草の代官として、天が与えた配材と言えるかもしれない。

もし、天草の初代代官が鈴木重成でなく、悪徳でなくても凡庸の代官であつたら、天草史は変わっていたかもしれない。

つまり、現在でもそうだが、行政規律がある中で、一地方行政官のできることは限られている。しかし、その限られた中でも、その地方から慕われる行政官と、その逆の行政官があることは事実だ。

それは、中央の方針に逆らう事でも献策したり、時によっては逆らったりすることも、地方行政官の資質であろう。

鈴木重成が、後世の人々に神としてまで崇められるのは、決して時の幕府施政に反して、独自に天草の施策を実行したのではなく、その献策への努力があつたからだと思う。

それには、一地方代官の進言・献策を「ハイ」と受け入れることは、不可能に近いことである。鈴木重成のバックに時の幕府の権威者、すなわち天草復興を重成に託した、松平伊豆守がいてこそである。勿論、幕府を震撼させた「天草島原一揆」の脅威があつてこそである。

したがって、鈴木重成が、後の世に神として祀られるほどの実績があつたのかどうか、考察してみよう。

亡所開発仕置

寛永十八年9月19日、重成は、天草に初代代官として赴任。重成は、城には入らず、富岡船津に代官所（陣屋）を構えた。これは、代官は民政官であり、幕府は武を熊本藩細川氏にゆだね、城には細川藩士が詰めた。

代官所の役人は以外に少なく、十数人だったようである。それは、事項に述べるように、村の行政組織の整備で、現在という地方自治の確立により、中央（代官所）の役人は少なくとも機能した。

行政基盤の整備と移民策の導入

重成がまず取り掛かったのは、行政組織つまり村の再編成である。天草を10組（志岐・井手・御領・本戸・栖本・教良木（後に大矢野）・砥岐・久玉・一町田・大江）に分け、その組の下に従来あつた120余の村を86カ村に編成。組には大庄屋、村には庄屋を配置。さらに、各村に年寄、百姓代を置き、各村の運営を行わせると同時に、代官所との連絡調整がスムーズに行われるようにした。

また、富岡には町制を敷き、細かく町割りを行い、町年寄を配置した。この時の村割が、ほとんど現在もそっくりそのまま残っている。

また復興の最大の問題は、極端な人口減により、農産が出来ないことであつた。いくら土地があつても、農産が出来ないと、年貢が取れないし、その前に復興ができない。そのため、幕府は移民政策を図り、西南各地の大名等に、一万石あたり、1戸の割合で、移民を割り当てた。

その結果、人口は増え、乱後20年には1万6千人に回復したようだ。移民策はその後も続けられた。したがって、現在の天草はアメリカのように

移民の島ということが言えよう。

年貢の軽減策

庄屋文書等によると、年貢の賦課率を極度に低減している。もちろん、代官一存で出来ることではなく、幕府の政策ではあったが。内容については、「本渡市史」に詳しく記されている。

遠見番と烽火場の設置

外国船の見張りとその伝達を長崎奉行所へのスムーズに行うために、富岡、大江崎、魚貫崎の三カ所に烽火場を設置し、地役人を採用し遠見番を配置した。これの烽火場はのちに、崎津、牛深に増設された。もともと遠見番所設置は、重成の施策というより、幕府の意向によるものであった。

定浦制度

定浦制度とは、現代風にいえば、漁業権制度と言えよう。その定浦制度の目的は、特定の浦に漁業権を認める代わりに、その規模に応じて公用に用いる舸子の確保にあった。各定浦を統率する弁指を置き、裏の規模に応じて、舸子役の人数を定めた。ただし、この制度を確立したのは、重成であった。重成が定めた7カ浦を17カ浦とし、舸子役299人を配置した。

寺社の建立

重成は、キリシタンに代わり、各地に寺社の創建を行い、民心の安定のため、仏教の普及に力を尽くした。

そのために強力な助っ人となったのが、正三和尚である。正三は重成の実兄で、旗本であったが、考えるところあり、出家をして仏教の道に入った。厳しい修行を重ねた結果、全国的にも有数の名僧となった。それは、彼の著書や弟子が著した正三の言行録などからうかがうことが出来る。もともと筆者のような凡人には、到底理解できないものであるが。

正三はその期待に応え、重成に乞われ来島し、3年間の在島期間の間に、仏教布教の基礎を築いた。

その一が、長崎皓台寺の住職一庭融頓、山口瑠璃光寺の中華珪法の両巨僧を招いたことである。彼らは、重成が建立した多くの寺の開山者となった。

重成は、曹洞宗10カ寺、浄土宗6カ寺を創建した。そして、幕府に具申して三百石の寺社領をそれぞれの寺社に与えた。

特に、本村の東向寺、志岐村の国照寺、栖本馬場村の円性寺、大江村の崇円寺は四カ本寺と称する。

ここで、疑問が浮かぶのが、この膨大な寺社を創建するにあたっての資金は、どうして得たのかということ。

本来ならば、檀徒からの寄付、あるいは創建者の資金によるものであるうが、もちろん創建時に檀徒は無し、重成も一代官で財力はない。

したがって、その建築費用は幕府に出させた。というより、キリシタン対策として、幕命であったかもしれない。また、建築に対して、技術者は天草で調達したことは考えられず、全国から呼び寄せた。そして、その建築労役はどうしたのだろうか。封建社会の事、通常は農民を無償で使うのもありかと思うが、おそらく正当な賃金を支払って、建設したものと考ええる。つまり、この建設が公共事業的性格をも合わせ持っていたものと推察する。

それは、重成を尊敬する農民の姿勢を見ても明らかだ。

この建設に対する、こうした疑問に答えてくれる史料は存在しないのだろうか。

重成は、建築費だけでなく、維持費も幕府に具申して、各寺に提供している。それが寺社領である。寺社領の総石高は三〇〇石である。この三〇〇石を金銭に換算するといくらになるのだろうか。当時は、一石、一反、一人と言われていたようである。つまり、一石の生産に要する田の面積は一反（約10アール）で、当時の人は年間1石（約180リットル）米を消費したといわれる。つまり寺社領として、300反（30町歩）の田を寺社に提供した。その寺社領になったところの地名が、本村の東向寺の寺領であつたところの地名が、「寺領」として現在も残っている。

田地の少ない天草で、30町歩といえかなりの面積で、いかに寺社を優遇したか分かる。別の見方をすれば、それだけ寺社の役目を重く見ていたということが出来よう。

ただし、この寺領を与えたのは、禅宗、浄土宗で、浄土真宗（真宗・一向宗）には与えていない。これを差別といえば差別だろう。一向宗は、かつて徳川家康に対峙した経緯やその教えなどから、徳川幕府（武家政権）の意に沿わない宗派であつたようだ。肥後相良藩では、この一向宗をキリスト教同様禁じていたことから分かる。寺社領を与えない代わりに、在家法談は自由であつたという。つまり自分の手で寺を維持していく上には、なんにも構わないということであろうか。

真宗寺は、1600年代には本願寺派（西）22寺、東本願寺派7寺の29寺が存在していた。

（参照・『天草寺院・宮社文化史料図解輯』）

当時の寺は、単なる宗教施設としてではなく、キリシタン取締りの寺請制度、村人の管理など一部役場的な役目を果たしていた。往来手形の発行も寺が行っていた。

重成建立の寺社

禅宗寺院

円通寺 志岐村

寛永20年（1643）

国照寺

志岐村

正保元年（1644）

一庭融頓 45石

瑞林寺

富岡町

正保元年（1644）

一庭融頓 15石

明徳寺

本戸馬場村

正保元年（1644）

中華珪法 10石

芳證寺

御領村

正保二年（1945）

中華珪法 12石

江月院

大江村

正保2年（1945）

一庭融頓 10石

遍照院

大矢野上村

正保3年（1946）

一庭融頓 10石

正覚寺

上津浦村

正保3年（1946）

中華珪法 10石

観音寺

荒河内村

正保4年（1947）

中華珪法 10石

東向寺

本村

慶安元年（1648）

中華珪法 50石

明栄寺

小宮地村

承応2年（1653）

中華珪法 2石

金性寺

教良木村

承応2年（1653）

中華珪法 3石

浄土宗寺院

寿覚院 富岡町

円性寺 寛永19年(1642) 応誉徹秀 13石

崇円寺 正保2年(1645) 光誉純慶 30石

九品寺 正保2年(1645) 伝誉通風 30石

江岸寺 正保2年(1645) 信誉教我 5石

無量寺 正保3年(1646) 大誉團徹 10石

信福寺 慶安元年(1648) 岳誉芦吟 10石

慶安元年(1648) 正誉法雲 5石

真言宗寺院

阿弥陀寺 佐伊津村 正保2年(1645) 再興 3石

宮社

飛竜宮 富岡町

10石

諏訪宮 湯船原村

7石

寺の特徴

百華山 円通寺

志岐村

円通寺は、重成が最初に創建した寺で、天草郡中の祈祷祈願寺である。一仏二十五菩薩像はここに安置されていたが建屋老朽化により取り壊され、現在は国照寺に安置されている。国照寺の末寺として、寺領は与えられていない。

寺社の中で、寺領も権威も第一といわれる東向寺について、やや詳しく見てみよう。

松栄山 東向寺

本村 四力本寺の一

東向寺は山号を松栄山というように、徳川家の菩提寺として建てられたといわれている。松が栄えるとは、徳川の氏が松平であることから付けられたものであろうか。

寺領は五十石、つまり寺領総石高の五分之一を占めるところからも、島内の最高権威を持っていたといえる。寺域(敷地)はかつての本町中学校まで及び、現在の倍以上の広さがあったようだ。

東向寺領は、現在の本町にあったが、文化八年(1811)の東向寺文書によると、寺領のある村の、本村、新休村、下河内村(現本町)の人高(人口)は、1333人で、本村とは別立てで寺領人高は392人となっている。総人口の約30パーセントに当たるところから、その大きさがわかる。

また、その格式の高さからか、歴代の住職は高德の人が多い。開山の中華珪法、13世瑞岡珍牛、15世上藍天中は特に有名だ。歴代住職の墓は、天草市の指定文化財になっている。

また志岐村の国照寺も四力本寺の一で、四十五石と東向寺に継ぐ寺領を与えられている。

この寺の山号万松山と松の字が入っており、その権威を高めているかのようだ。後に作られた、寺裏の日本庭園は見事だ。

四力本では、別に、栖本・湯船原村の仏日山 円性寺、河浦・一町田村の天草山 崇田寺がある。先の東向寺、国照寺が禅宗寺に対して、こちらは浄土宗寺である。

また、特徴ある寺としては、本戸馬場村の向陽山 明德寺がある。

この寺の特徴は、石段と楼門であろう。石段の高さもさることながら、その石段に十字が刻まれているともいわれ（寺に登るため十字を踏む）、また楼門に掲げられている双聯の片側には「将家賢臣革弊政芟除耶蘇之邪教」と、キリシタン禁制を特に意識している。

「鈴木さま」一考察

一地方の官僚であった人が神となる例は、全国史的に見てもほとんどないのではないだろうか。そのまれなる例の神となったのが、天草島原の乱後天草の復興を、幕府からゆだねられた、天草初代代官鈴木重成である。

それではなぜ、鈴木重成は、神として現在なお、島民からあがめられているのだろうか。

根強い説としては。

乱を招いた一因の過重な年貢。その元となる石高を死を賭して半減したことにあるといふ。

重成が「鈴木さま」と呼ばれる神となったことに對して、「「鈴木さま」建立に関する伝承と課題」という小論が、『天草代官 鈴木重成 鈴木重辰関係史料集』『鈴木重成とその周辺』で平田豊弘氏により、述べられているので、一部それを参照して考えてみたい。天草島内には、32カ所に鈴木重成を祀る「鈴木さま」があるという。残念ながら、筆者はその確認

はできていない。

この「鈴木さま」には、重成だけでなく、二代目代官重辰、正三和尚も共に「鈴木三神」として祀られているのが特徴である。重辰は、兄正三の実子で重成の養子となった。重成没後、二代目天草代官に任ぜられ、重成の意志を継ぎ、善政を敷いたといわれる。所謂石高半減は、重辰の代に実現している。正三は、重成の兄であり、旗本であったが、思う処あり出家し仏道を学び、名の知られた名僧となった。

さて、石高半減問題である。

これまでの石高は、元天草の支配者であった、唐津藩主寺沢時代から四万二千石と言われているが、実際は三万七千石であったようだ。それは、重辰の代に、万治検地と言われる検地で、二万千石となったため、それから逆算して四万二千石となったようである。

それでは、この石高半減（石高の減少）は、天草の島民にどんな影響を与えたのであろうか。一般的に考えると、石高が年貢の基準とされているので、半石になったということは、年貢が半分になり、農民の負担が軽減されたというもの。しかし、研究によると、実際は、年貢が増えた場合もあり、減った場合でも、大幅に軽減されたことはなかったようだ。

万治検地の実施は、石高半減施策というより、各村の地域間格差の是正が、第一の目的であったと考えられる。それは、史料によっても明らかだ。旧本渡市の各村新旧石高を見てみると、村高が大きく減少した村は、佐伊津、本戸馬場、町山口、宮地岳、志柿などの村で、逆に本泉、下河内、新休、食場各村等は増えている。史料の残っている中で、一番大きく減ったのは、佐伊津村のマイナス45・4パーセント。逆に最も増えたのは食場村の151・6パーセントであり、平均すると、65・4パーセント減となる（筆者計算）。

さらに、石高は正を機に年貢率が引き上げられている（宗像家文書）事

実も見逃せない。つまり、荒蕪した村の復興のため、これまで年貢率は引き下げられていた。しかし、この検地ころには村の回復も進み、年貢賦課率が全国の天領並みの水準に引き上げられたとみられる。

また興味深いことに、「鈴木さま」は、村高が増加した本泉、新休、下河内村にあるのに対して、減少した本戸馬場、町山口、宮地岳、志柿にはない。これは、いわゆる石高半減が、鈴木重成を神として祀ることになったということに、大きな疑問を呈する。

「石高半減」前後の石高の変化については、添付資料参照。

さて、「鈴木さま」建立についてみてみよう。

一般的に「鈴木さま」と呼ばれているが、その惣社として、天草市本町に「鈴木神社」がある。その他社屋の「鈴木さま」は、高浜村、坂瀬川村にあり、その他は石祠か塚である。

それではこの「鈴木さま」は、何時から造られたのであろうか。

その前になぜどうして造られるようになったかということが疑問に浮かぶ。

それは、鈴木重成の功に対して、恩に対してということとは、間違いないだろう。では、「鈴木さま」建立が、農民の自発的行為なのか、上から命令または指示されたのか。



河浦町今村の鈴木塚
鈴木さまのはしりといわれる。
創建万治二年（1659）

松田唯雄著の『天草近代年譜』によると、「寛文五年（1665） 是頃 領主忠昌、先支配鈴木重成、重辰の功績を称え、郡民をして各村に鈴木塚を建てしむ」としている。ただし、根拠は不明とのこと。忠昌とは、戸田忠昌のこと、この年天草は天領から私領になっている。また、この年は、重成没後12年後であるが、重辰はまだ生存中である（重成没は1653年）。

「鈴木さま」の建立として一番古いものは、河浦町今村の「鈴木塚」である。創建は万治二年（1659）で、建立者は一町田村の大庄屋松浦半佐衛門」である。

「鈴木さま」は、島内一円に平均してあるかというと、そうではなく、疎密がみられる。多いのは、現町名でいうと、苓北町、天草市本町、天草町、栖本町、上天草市松島町などで、無いのは、上天草市大矢野町、姫戸、龍ヶ岳町、天草市有明町から下浦町へかけての上島西筋などで、少ないのは天草市天草町、河浦、牛深町、新和町などである。

この分布の違いを、平田氏の説を参考にすると。

① 姫戸町、龍ヶ岳町、御所浦町に「鈴木さま」がないのは、この地方はキリシタンの影響が少なく、真宗の影響が強かったためだと思われる。重成は、多くの寺社を創建しているが、禅宗、浄土宗が主で、真宗寺院は、建立していない。興味深いことに、創建寺院も分布が偏っており、御領組、本戸組に寺院も「鈴木さま」も多い。

② 有明町から志柿町への西筋に、「鈴木さま」がないのは、この地はこぞつて乱に参加して、無人の地となり、その地に移民により村が復興されたため、重成との関係が希薄だったためであろう。

③ 「鈴木さま」の建立が多いところは、先に述べたように、鈴木重成の宗教政策が重点的になされた地域である。それは、キリシタンであったが、重成によって、温情をこうむったことにより、感謝をした表れであったためか。

「鈴木さま」に銘文のあるものは、約半数であるが、その年代はまちまちであり、古くは、万治二年（1659）であるが、ほとんどは1700年後

半から1800年代である。もしこれが、再建年でなく、創建年としたら、何を意味しているのだろうか。

また建立者も当然のこととして、庄屋などの村の有力者が多い。

各地の鈴木さま

天草上島

上天草市松島町合津 金毘羅山

〃 松島町今泉

〃 松島町内野河内

天草市倉岳町棚底 棚底天満宮

〃 倉岳町棚底 棚底祇園社

〃 倉岳町宮田 西の原

〃 栖本町湯船原 諏訪神社

〃 栖本町湯船原 中野

〃 栖本町河内 河内神社

天草下島

天草市楠浦町寺中

〃 新和町大宮地 大宮地八幡宮

〃 栢宇土町大迫 大迫神社

〃 栢宇土町宇津木 宇津木神社

〃 栢宇土町平床

〃 本渡町本泉 本泉神社

〃 本町栢の原

〃 本町新休

〃 五和町井手 井手天満宮

〃 五和町城木場 城木場

〃 天草町高浜 高浜八幡宮
〃 天草町大江 大江八幡宮
〃 河浦町今富 今富神社
〃 河浦町今富 中山十五社宮
〃 河浦町今村 轟平
〃 河浦町宮野河内 松崎十五社宮
〃 牛深町下須島 正平
〃 久玉町 久玉八幡宮
〃 苓北町坂瀬川 坂瀬川神社
〃 都呂々 大平
〃 都呂々浜
〃 都呂々木場
〃 志岐 城下 若宮神社
〃 白木尾

自刃説に対する一考察

天草島原の乱後、天草は山崎家治の私領となったが、あまりの荒廃故に一小大名の手に負えないとして、天領（幕府領）となった。そこを理解している重辰が、二代目として代官に任ぜられ、重成がやり残した仕事を完成させたが、重成がこのことを予想することはまず困難であったろう。

次に任命される代官が、自分と同じような思いで、熱意を持って復興に取り組むとは限らないからだ。

石高是正も、確かに重要な課題だが、それと同じようなことが、まだまだ多くあったはずだ。その重成が、自らの死で途中で終わらせることを、本意とするであろうか。逆に、病床にあって、一日も早く健康を取り戻し

たいと思っていたことだろう。死が避けられないと思ったとき、彼はそれこそ必死で、幕閣に、自らの復興に架ける思いを、訴えたことだろう。だから、二代目に、重辰を任命したと思われる。

事実、重辰は重成の後を受け、重成に勝るとも劣らない復興策を行っている。

重辰は、承応三年（1654）三月九日、天草二代代官に任命され、明暦元年（1655）六月二十一日に着任した。そして、寛文四年（1664）京都代官に転出するまでの10年間、代官として、重成が耕し種を蒔いた田畑に、苗を育て実を付けた。

その最大の業績は、検地（万治検地）を行い、石高（村高）の是正である。それも大まかな是正でなく、事細かく正確を期した石盛を行っている。その結果、史料にみるように、すべての村が減じたのではなく、逆に増えている村もある。それでも、平等に正確に検地が行われた結果、増えた村人も不満なく受け入れたようだ。それは、その増えた村に「鈴木さま」が祀られていることから想像できる。

その他、民生諸般に数々の政策を実施した。

つまり、重成の復興策は、まだ道半ばであったことが分かる。

次に、病死説について見てみよう。

まず、自刃を裏付ける史料は皆無だということである。逆に病死を裏付ける史料は多い。後ページにも記すが、一町田八幡宮の石灯籠には、鈴木重成公病即消滅福寿増長武運長久」と彫り込んである。建立月日は「承応二癸巳天八月吉日」となっており、死去する二ヵ月である。この石灯籠は、重成の寄進とされていたが、地域史家の鶴田文史氏の調査の結果、重成の病氣祈願の石灯籠と判明した。

また、重成死去後、富岡に建てられた供養碑には「参観齋武府至私宅不意就于病床日久矣医王拱手失術天哉命遂逝去」と記されている。これを現代文に訳すと、「参勤のため江戸に至ったところ、私宅に於いて不意に

病床に就く。病床は長く、医王（薬師如来）も手をこまねいて、快復する術もなく、ついに天命かな、逝去する」

その他芳證寺文書には「重成公寺社方の御主印為頂戴、御参府被有、江戸にて御病死之跡、」「郡内社寺へ御朱印地下賜稟請ノ為江戸へ上ラレ出府中遂に不幸病に罹リ逝去セラル依テ、・・」とある。ただしこの文書は重辰についての文書である。またこの文書は当寺古来伝承を昭和初期に芳證寺十八世宝山泰重が記したというので、史料価値は薄いといえるかもしれないが。

本戸組大庄屋木山家文書には「寺社山林境内御證文為頂戴御上嚴之处於江戸御病死・・」とある。これは、十代大庄屋木山十之丞が文政年中の記録である。文政年間には、重成の死から約170後の世であり、こちらも絶対的史料とはなり得ないだろう。

これら両文書には、文書石高半減は重辰の働きとしている。

自刃説を主張する人は、病氣になって、自らの命が尽きんことを悟り、願いであつた石高是正を嘆願するために、腹を切った言うかもしれないが、この両文書に、重辰の文書とはいえ、重成が江戸に上った理由に、石高に關するものは無いということだ。

ではなぜ、自刃説が大手を振って、まかり通っているのだろうか。

鶴田文史氏の研究によると、初めて自刃説が、世に出たのは、なんと昭和三年の事だという。初めて自刃説を唱えたのは、郷土史家の先駆者元田重雄だ。氏は郷土新聞「みくに」に、次のように投稿している。「一死以テ郡民塗炭ノ苦ヲ除カント決意シ其旨ヲ遺書シテ自刃セリ」

この説が登場した背景には、時代背景があつたと考えられるという。それは、日本は軍国化を強め、皇国史観が台頭していた時代であつた。つま

り、靖国にみられるように、国のために命を落とした人を神として祀る。このことにより人心を国威発揚に取り込んでいった時代であった。

当時、「鈴木さま」は明治時代に「鈴木明神」という称号は得ていたが、社格はなかったようだ。その神社の昇格運動と自刃説が、セツトになったものと思える。

当時の神社は、村社・郷社・県社・国社の社格があった。鈴木神社は無登録であった。そのため、県社に昇格させようという運動が昭和の初めに起きた。（鶴田説）

社格制度は戦後廃止された。鈴木神社はどうとう村社にも昇格できなかったようだ。理由は不明だが。

さて、うがった見方をすれば、鈴木重成を今日の我々が評価する時、自刃したか、病死したかで、その度合いが違うであろうか。たしかに、自らの死を賭して、天草島民のために尽くしたといえれば恰好いい。逆に病死であれば、評価は低くなる。

果たしてそうだろうか。病気は、重成にとつても不本意の事であり、自らの意志で、天草復興にさじを投げたのではない。

病死であろうと、今日の人々が、重成を尊敬する気持ちは、微塵も変わりないと思う。

さらに言うと、鈴木重成を貶める考えは毛頭なく、子供の頃から親や地域や学校で学んだ、鈴木重成に対する崇拜の念はいささかも揺るがない。ただし、史実は曲げてはならないということ。

その歴史の真実は、不明な点だらけで、不明な点が真実よりはるかに多い。ある小説家や歴史史研究家が発した仮説や空説が、独り歩きし、いつの間にかそれが史実となっている例は、数知れない。

その不可能ともいえる史実を研究することはもちろんだが、間違った史観を正す勇気も必要だろう。

歴史研究者には、さらに史料発掘等の研究に努められ、我らにより質の高い歴史、歴史の面白さを提供して欲しいと切に願う。

ただ、小説は別で、史実と明らかに異なることでも、それはそれでいい。しかし、この小説が、いつの間にか真実（史実）と受け入れられていることに、まじめな？筆者は、違和感を感じている。

鈴木重成関係略年譜

天正七年（1579） 重成の長兄、正三生まれる。

天正十六年（1588） 重成生まれる。

慶長五年（1600） 関ヶ原合戦。重成の父重次家康に従軍。戦勝後

三河国加茂郡に五百石を与えられる。

慶長八年（1603） 天草は、寺沢広高の領地となる。

慶長十二年（1607） 正三の長男、重辰生まれる。

慶長十九年（1614） 正三、重成ら4兄弟大坂冬の陣に従軍。

元和二年（1616） 重成、駿府の家康に仕える。

元和六年（1620） 家康没・重成は秀忠に仕えるため江戸に向かう。

寛永八年（1631） 正三出家。

寛永十四年（1637） 隠田発覚。全員処刑の奉行方針に、重成必死の

嘆願で、女子供を助ける。この時処刑者の苦提を弔うため、一仏二十五菩薩像をつくる。

寛永十五年（1638） 天草島原の乱起る。重成、鉄砲奉行として参戦。

天草島原の乱終結。

重成は、諸勢引き上げる中、残務整理のため島

原に留まる。天草は、山崎家治支配となる。

寛永十六年(1639)

島原滞在中の重成、天草荒廃の開発を命じられ、天草に渡る。

寛永十八年(1641)

天草天領となり、**重成、天草の代官**となる。

重成は、城に入らず、もと本戸郡屋敷に役所を構える。

郡中に地役人採用。各地に遠見番を置く。郡中を十組・八十六カ村に区分け。組に大庄屋、村に庄屋を配する。

富岡に町制に布く。

寛永十九年(1942)

重成、正三を天草に招き、教化を図る。

乱後の住民減少に就き、移住を図る。

重成上府。郡状を報告、寺社領寄与を願う。

重成、寿覺院を皮切りに各所に寺社創建・再建を行う。その数21寺。

浦方運上制定。

正保二年(1945)

富岡に天草島原の乱で戦死した供養塔を建てる。

正保四年(1647)

重成寄進の首塚が原城跡に建てられる。

慶安元年(1648)

寺社領寄与三百石。

承応二年(1653)

重成上府。江戸にて発病。

一町田八幡宮に重成病氣平癒祈願の石灯籠が建てられる。

重成、江戸にて病没。

承応三年(1654)

富岡の飛龍宮に、重成の供養碑が建てられる。

重辰が天草代官を任ぜられる。

明暦元年(1655)

鈴木正三没。

万治二年(1659)

天草の検地が行われ、二万一千石となる。

郡中七浦、浦方運改定。

寛文四年(1664)

重辰、天草代官を解かれ、天草は私領となり戸

田忠昌に与えられる。

寛文五年(1665)

戸田忠昌、重成の功績を讃え、各村郡民に鈴木塚を建てさせる。

寛文十年(1670)

重辰死去。

天明八年(1788)

本村の鈴木社を石造りから茅葺きの社殿拝殿に改建。正三、重辰も鈴木三神として祀る。

10月14日を社祭日として定め、相撲興行が始まる。石造り社殿は、牛深村へ付与。

文化八年(1811)

鈴木神社に鈴木明神伝碑が建てられる。

文政六年(1823)

本村鈴木神社に対し、神祇管長より鈴木明神と

称すべき神宣状が下附される。

文政七年(1824)

鈴木明神の社殿再建成就。

天保八年(1837)

牛深村の鈴木神社、本村の分神50年を期して、

石造り社殿改建。

鈴木重成関係史跡等

鈴木重成公供養碑

荅北町富岡

この碑は説明板に記してあるように、鈴木重成が没した翌年、家臣等が建立したものである。

特徴としては、碑文に「私宅不意就于病床日久矣医王拱手失術天哉命哉遂逝去」とあるように、私宅で不意の病氣になり、医療を尽くしたが天命ゆえについに死去と書かれている。

鈴木重成公供養碑

鈴木三郎九郎重成は、島原の乱後天草が天領となった時の初代代官で、乱後の天草復興に努力した。天草の民を救うには過重な年貢を軽減する



鈴木重成供養碑
荅北町富岡

より外にないと決心して、このことを幕府に建言したといわれているが、承応二年（1653）10月15日江戸の賜邸で歿した。（一部には、幕府への建言の責を負って自刃したともいわれている）

この碑は、家臣等が代官の徳と偉業をたたえ、その功を顕彰するため翌三年建立したものである。

昭和46年8月24日

町指定文化財

鈴木重成公供養碑

鈴木重成公は天草島原の乱後、天草が天領となった時の初代代官で、乱後の荒廃した島内の復興に尽力されました。

過重な年貢に苦しむ島民を救済すべく、幕府老中に年貢の軽減を建言した名代官であったといわれています。後にこの建言の責めを負って自刃したともいわれています。

この碑は公が没した安政二年（1653）の翌年、公の徳と偉業をたたえ、その功を顕彰するために家臣たちが建立したものです。

石碑には公の功績や極楽往生祈願など、建立の由来が書かれています。

鈴木重成公供養碑へ碑文

異中院殿不白英峰居士

○竺土大仙心密惟

承応二癸巳十月十五日

当郡兇徒一揆之後村落家荒人亡矣是為郡職鈴木重成公蒙大樹鉤命下着矣其人有人仁有義可謂儒門君子武門良匠乎公在国十余霜不捍陰再興社寺撫育村民仁政甚大也不成期年郡裏之豐穰勝于往古矣然而有年為參觀嚮武府至私宅不意就于病床日久矣医王拱手失術天哉命哉遂逝去了即其家老之信士等於于此地建石塔一基以伸供養矣夫塔廟者諸仏安住之处功德最第一也乃至童子戲聚沙為仏塔知是諸人等皆已成仏道云々況於実信造立乎其徳深也重也伏願憑茲善利居士証得菩提妙果安着涅槃彼岸矣便説禪偈銘之曰

一塔忽巍然 湘南潭北辺

法身真実相 歴劫已長堅

于時承応三申午春時正月

施主各合爪

鈴木神社と鈴木明神伝碑

天草市本町

鈴木重成は、承応二年（1653）江戸で死去した。たまたま江戸にいた中華珪法は、重成の遺髪を天草に持ち帰り、東向寺の領内に埋め、遺髪塚を建てた。その地に寛文五年（1665）に鈴木塚が建てられ、寛延二年（1749）に社殿を新築し、鈴木社として奉納した。当所は石造りであった。天明八年（1788）石造り社殿を木造社殿に改建。祭神に重辰、正三を加え三体とする。

文政六年（1823）神祇管長より、鈴木社に鈴木明神と称すべき神宣状が下附される

文政七年（1824）鈴木社社殿再建。

明治元年（1868）鈴木宮社が鈴木神社と改称。

鈴木明神伝碑は、文化八年（1811）に建立された。正面には東向寺十五世天和尚の書で「**鈴木明神傳**」と記されており、碑文は3面に渡って書かれている。撰文は、北越の儒者魚沼国器である。魚沼は天草に3年間滞在したといい、その折り、鈴木三公を篤く敬う島民の心に打たれて書いたと言われている。ただし、現在は磨耗が激しく、判読は困難。ただし、内容は原文、書き下ろし文、現代文訳で『鈴木・史料集』に載っているの

で、興味のある方は参照されたい。

天草市の指定文化財となっている。



鈴木神社
天草市本町

鈴木神社由緒

鈴木神社は切支丹の乱後の天草を復興し濟世救民のために身命を賭し給うた鈴木三郎九郎重成公 鈴木九大夫重三公 鈴木伊兵衛重辰公を御祭神とする神社であり世に「すずきさま」の名で親しまれ三神の偉徳は「鈴木精神」と仰がれる。

寛永十四年 唐津藩主寺沢志摩守支配下の天草では万余の民がその苛政に抗して蜂起し島原の民と呼応して遂には原城の露と消えた。

大乱の後天領となった天草の初代代官鈴木重成公は寛永十八年より承応二年に至る12年間三河武士の果斷と卓越した識見 深い慈愛を傾注して亡所と化した天草の再建に尽瘁せられたのであった。

即ち 一揆犠牲者の慰霊 殖産 移民誘致 行政組織の再編 海浜防備 農漁民の地位保全 衛生の普及 社寺の創建と復興 雑税の減免等

の諸施策がそれである。

かくて我々が祖先の生活と心は徐々に向上し安定に向かった。

その仁政の陰に実兄鈴木重三（正三）公の深い思想と助言建策が大いに与って力あつたことも我々の銘記すべきところである。

しかし天草の困窮の源はこの地の生産力の実態を無視した石高の査定（四万二千石）にあった。代官はみずから再検地して 幕府に対し天草の石高半減を建議 再三の請願も容れられぬと看るや 領民塗炭の苦を除かんと赤心を披瀝し 承応二年10月14日 江戸の自邸に割腹して果てられたのである。

二代代官 鈴木重辰公 またよく先代の仁政を継承し 更にその熱願達成のため挺身せられたため 重成公七年祭万治二年 幕府は遂に天草の石高を二万一千石に半減する旨指令を発した。

島民ひとしく先代の遺徳をしのび 請うて遺髪をこの地（御本殿後方）に埋葬の感謝報恩 慰霊顕彰の篤い念を発して鈴木社を建立した。当社はその後島内三十余に及んだ鈴木社の本社となり今日に至る。

その間文政六年「鈴木明神」号下附 文化八年鈴木明神伝碑建立。安永7年社殿新築。天明八年重三重辰二神を合祀 奉納相撲大いに賑わう 明治十七年社殿改築 昭和十七年復興奉賛運動昂揚するも大戦により中断 昭和三十四年石高半減三百年記念大祭 昭和五十八年重成公没後三百三十年大祭並びに記念事業として拝殿の改築その他を奉仕した。

鈴木三神の広大な御神徳と三神を敬仰する天草島内外の信篤き人々の心とが相和し相応して御神威ますます高まり思徳はいよいよ深い。

身を整え心を清めてお参りしましょう。御神徳を讃え感謝の真心でお祈りしましょう。

神を敬い世のため人のため奉仕する心の輪を家庭と地域社会に広めましょう。

鈴木神社社務所

天草市指定文化財



鈴木明神伝碑
天草市本町

鈴木明神伝碑

指定年月日

昭和46年4月26日

管理者

鈴木神社 田口孝雄

天草・島原の乱後天草は天領となり、初代代官として着任した鈴木重成公は荒廃した天草の復興に全力をあげる。特に領民の苦しみを除くため石高（四万二千石）の是正を再三幕府に具申、遂に上書して自刃し幕府もその赤誠にうたれて石高半減を見るに至った。この碑は文化八年（1811）建立、撰文は魚沼国器、書は岡田芝山の手になり、鈴木重成、正三、重辰公の遺徳を長く後世に伝えている。

天草市教育委員会

鈴木さま

天草島原の乱後、天草は幕府の直轄地「天領」となる。初代代官には

三河武士の鈴木重成が任ぜられ、兄正三と共に荒れ果てた天草の復興に数多くの治績を挙げた。当時天草の石高は四万二千石で、重成はその重税にあえぐ島民の苦しみを救うため一死を以ってその石高半減を訴えた。(時承応二年(1653)10月15日自刃年 66歳)二代代官鈴木重辰は養父の悲願実現に熱誠をつくし、万治二年(1659)天草の石高は遂に二万一千石に半減された。

島民はその遺徳と善政の恩恵を永久に忘れまいと、島内各地に鈴木神社を建てて鈴木さまと尊び崇め祭った。ここ鈴木神社は正三、重成、重辰を祀るこれらの宗社である。境内には重成の遺髪塚や三公の事蹟を詳細に記した天草市指定文化財鈴木明神伝碑がある。

平成八年三月

天草市教育委員会



鈴木重成像
苓北町富岡

鈴木重成像

苓北町富岡 富岡城跡

富岡の鈴木重成像は、富岡城南側入り口にある。

天草代官 鈴木重成公

天草・島原の乱後、山崎甲斐守が富岡城修築を終えた寛永十八年(1641)天草は天領となり、初代代官として赴任し、全島の統治に当たった公は、先ず郡内の行政組織を整備した。また実兄正三和尚の授けを得て、寺社を復興し、島民の思想善導を図ると共に、移民を求めて荒地を開拓し、殖産興業を奨励した。特に当時天草の石高四万二千石が過大であり、貢納の過重が天草島原の乱の一因であったことを痛感した公は、その半減を再三幕府に上申したが容認されなかった。承応二年(1653)春更に上府し八方陳情を続け、その成就を願いながら同年10月15日江戸飯田橋賜邸において66歳の生涯を閉じられた。(一説には自刃したとも言われている)公の悲願は幕府に認められ、養子の重辰代官の万治二年(1659)石高二万二千石に半減され、公の素志は達成された。その後島民はあげて公の遺徳を偲んで各地に鈴木神社を奉納している。

富岡郊外にある「富岡吉利支丹供養碑」(国指定史跡)は公が建立したものである。また瑞林寺境内には公の家老等が建立した「鈴木代官供養碑」(町指定文化財)がある。

鈴木重成公病即消滅祈願の石灯籠

天草市河浦町一町田
一町田八幡宮

重成は、前記の説明板や書籍などで、石高半減を幕府に訴えるため、自刃したと云われているが、自刃したという史料はなく、病死が真説であるようだ。

その病死説の裏付ける史料の一つが、一町田八幡宮の石灯籠。

一町田八幡宮には、左右に二基の石灯籠がある。これは、従来、鈴木重成が寄進した石灯籠と言われていた。しかし、刻字を詳細に見てみると、鈴木重成の病氣快癒を祈願した、組中の建立と分かる。



鈴木重成病氣平癒祈願の石灯籠

河浦町一町田

〈碑文〉

《東灯籠》

奉願主 壱町田大組頭建立

(下に20名の名前)

《西灯籠》

奉寄進

□□□□□□

八幡宮□□□□□□祈願者

当奉職

鈴木重成公病即消滅福寿増長武運長久

子孫繁昌祈所 当組中七□□□寄進祝

承応二癸巳天八月吉日

阿弥陀如来と二十五菩薩

阿弥陀如来と二十五菩薩像は、円通寺に安置されていたが、円通寺本堂が老朽化したため解体され、現在は国照寺本堂横の阿弥陀お堂に安置されている。

円通寺は、鈴木重成により、天草郡中の祈祷祈願寺として建立された。

白華山 円通寺の由緒



阿弥陀如来と二十五菩薩

苓北町志岐 国照寺

白華山円通寺は、天領天草の初代代官鈴木重成公によって最初に創建された天草郡中の祈禱祈願寺である。一六三七年秋～三十八年春（寛永一四～一五）の天草島原の乱から五年の歳月を経て、一六四三年（寛永二〇）、重成公の兄、石平正三大庵主を開基・勅持賜了外廣覚禪師一庭融頓大和尚（長崎・皓臺寺伝法開山）を拝請開山として当山は創建された。

歴代二三世と三五六年の星霜を経た由緒ある当寺の本堂再建は断念されたが、寺域を整備し、本尊の阿弥陀如来と二十五菩薩は、一九九四年（平成六）七月に苔北町文化財指定を受け、現在、本寺の萬松山国照寺の本堂横に建立された阿弥陀御堂に安置されている。

阿弥陀如来と二十五菩薩の由来

鈴木重成公が上方代官として大阪におられた時、隠田（おんでん）（脱税のための隠し田）が多数発覚し、伏見奉行小堀遠州は、男女全員数十名の死罪を下知された。

しかし、重成公は、「隠田は確かに重罪だが、家康公以来、この様なことで女子供まで処刑されたことはない。身命をかけても救わねば。」と伏見奉行と談判され、一方、この間、正三和尚は一晚中読経して神仏の加護を祈られた。そして遂に、女子供のみは助命と決した。

その後処刑された人々の私財は、管轄していた代官に賚賜された。そして、それを受けた正三和尚は、隠田処刑の人々の菩提を弔うため、阿弥陀如来と二十五菩薩像を刻み、足助（現・愛知県東加茂郡足助町）の十王堂に祀られた。

然るに、鈴木代官御来島の折、この一佛二十五菩薩像は、寺社や仏像が乱によって失われていた天草の信仰の拠り所になるようにとの重成公と正三和尚の思いが込められつつ、足助の地よりはるばる天草まで移されたので、因縁深いこの一佛二十五菩薩像は、隠田処刑の人々と天草島原の乱の犠牲者の供養仏であると共に、天草島民のために、四万二千石から二万一千石への石高半減を嘆願（將軍直訴）し、切腹して一命を捧げられた重成公の持仏であり、今なお島民の平穏無事を祈願する祈禱仏で

ある。

尚、近年では、一九九八年（平成一〇）五月に円通寺の境内整備にかかり、阿弥陀如来石尊像・山門・東司・白堀等を建立した。歴代墓地も整備し、五輪の塔を建て、安住を懇願した。

一九九九年（平成一一）六月に落慶法要を厳修し、現在に至る。

一九九九年（平成一一）六月吉日

国照寺住職

円通寺兼務住職

活融琢道（清光） 合掌

富岡吉利支丹供養碑

苔北町富岡

《現地説明板》

■寛永十四年（一六三七年）に起こった天草・島原の乱で討ち死にしたキリシタン一揆軍の首級一万余りを三分して埋めた一つがこの首塚である。この地に正保四年（一六四七年）鈴木重成代官が慰霊のために供養碑を建立したもので、碑文は山口瑠璃光寺住職中華珪法の撰である。

《碑文》《現地説明板の読み下し文

（上段中央）

○ 若し法（経）を聞く者有らば一として成仏せざるは無し 竊に惟んみるに

（上段）

夫れ原ぬるに鬼理志丹の根源は、専ら外道の法を行いて、偏に国を奪わんと欲するの志二無き也。

明土（現中国の古い時代）に於ても亦斯の徒を禁ずること倭朝（我が国）に異ならず。昔年東照神君（徳川家康）是を制すること嚴重也。然りと雖も彼の徒党、外直くし而曲性内干存す。仏法を貴ばず、王法を重んぜず、終に逆心を顕して、下の如く云う。是により政（征）夷の欽命、九州諸將に下る。斯の時彼の兇徒等残らず亡滅したる。即ち天下の執権、其の数万額を聚めて三分なし、長崎、高来、当郡三所にこれを埋却矣。是より扶桑（日本）國中、太平を歌い舜（中国古代の国）日に当り堯（中国古代）風を扇ぐ。祝々俦々。

（下段）

堪忍世界、何閻浮提日域（何閻浮提の中の日本）肥之後州（肥後の国）天草郡に益田四郎という弱冠者あり。鬼理支丹宗旨を立て、外道の法を以て国中国外の男女に示し而して党を為す。寛永十四白（一六三七）丁丑（ひのとうし）中冬（十一月）に当り、其の党仏閻神社を破却し、村落民家を焼き払い、肥前高来郡に推渡り原城に楯籠る。其の勢三万七千人、忽ち国家を覆さんと欲す。是に繇り列国諸將彼の戦場に馳せ向い、夜に討ち日に闘い、海陸合戦休む時無し、終に明年暮春に至り城郭を打破し、彼の兇徒数千を打捕す也。残

党全からず悉く滅亡し畢る。即ち、当郡当村の於ても亦三千三百三十三額を聚め、一壙に埋却矣。然し而星霜十余歳を歴て今に至る。時の郡職、熊野権現の第一臣能美大臣重高数代の嫡孫鈴木重成公、篤く三寶を敬い全く仁義を兼ね、加之武に達し、文に通矣。公、彼の塚壙を見、数千之魂霊の悪趣に沈淪し苦患するを愍れみ、塚上に碑石を建て、以て供養を

伸ぶ。伏して願わくば斯の善根に憑り、諸霊速やかに仏土に生じ、無上正等覺心乃至平等利益を證する者也。野偈の一章を回打して結末の句再云う。

仏性賢愚平等法 何ぞ更に生死の罪業有らんや

本来無物空 亦空 流水潺湲 山及業

時 正保四白（一六四七）丁亥（ひのとい）

七月廿五日

釈氏 中華叟これを記す

※○は俗にウハキユウと言われているが、意味は不明。字は資料写真を参



国指定重要文化財 富岡切支丹供養碑

苓北町富岡

照。

「鳥八曰について」とタイトルで、故岡部禪龍氏が「潮騒」第7号
天草文化協会刊で解説されている。

※何閻浮提¹仏教用語で古代インドの世界観で人間が住む大陸。南にある
ことから南が付く。

用語が難しく、読みづらくかつ意味も分からない所もあるが、原城に散つた
キリシタン宗徒に対する、供養碑であることは違いない。ただし、言わ
んとすることは、キリシタンは外道の法理であり、あなた達の行った行為
は、間違った行為である。したがって、仏法に帰依し、成仏せよと説いて
いる。それは、キリシタンを深く信仰し、死という究極の選択をした人々
にとって、仏法で供養しても、有難迷惑の何ものでもないだろう。

キリシタンは、当初吉利支丹という訳字が用いられたが、やがて禁教が
進むにつれ、切支丹となった。さらに、この碑では、鬼理支丹という、キ
リシタンにとっては最悪ともいえる鬼が使われている。後に文化財と指定
される時、この碑の用語として、吉利支丹という字に用いられているが、
中華珪法の筆はキリシタンには容赦ない。

それは、後世、靖国神社に祀られたくないとの一部遺族の声は無視され
る、権力者の横暴と同じことだ。

もし、本当に供養する気があるなら、キリシタンとして死んでいった人
には、キリシタンとして供養するのが妥当だろう。

この供養碑は、乱後原城で戦死者の首を三分し、原城の近くと、長崎に、
天草富岡(当時は志岐村であったと言われる)の地に埋められた。

本来ならば、原城にそのまま埋めればいいものを、なぜ面倒に長崎や天
草まで運んで埋めたのであるのか。そこには供養という意味は到底なく、
長崎、天草というキリシタンの本拠地とも言うべき地へ埋めたのは、見せ
しめの意味が大きかったのだろう。

キリシタンは切られても生き返るということ、首と銅は別の所に埋め
るという意味合いもあったという。(故浜名志松氏「鈴木重成代官の行政
と評価」『天草鈴木代官の歴史検証』)

それを、情篤き鈴木重成は、死者を悼み供養したという点で、元キリシ
タンが多数いた天草島民の心を癒したことも、見逃せないことだと推察す
る。本来ならば、キリシタンとして供養したいところだが、それは勿論許
されないことで、幕府の仕法に従い、仏教での供養にならざることは、仕
方のないことであったことも、付け加えたい。

以上、私感を述べてみた。

参考資料

『天草代官 鈴木重成 鈴木重辰関係史料集』

鈴木神社社務所 田口孝雄

『鈴木重成とその周辺』

鈴木重成公没後三五〇年記念事業実行委員会

『鈴木重成公小伝』

鈴木神社社務所 田口孝雄

『天草 鈴木代官の歴史検証』

天草民報社 鶴田文史

『幕藩体制と石高制』

塙書房 松下志朗

『本渡市史』

本渡市

『天草寺院・宮社 文化史料図解』

天草史談会 鶴田文史

『天草近代年譜』

図書刊行会 松田唯雄

『鈴木重成・重辰とその一族』

熊本地歴研究会 鈴木喬

など

鈴木重成関連資料

天草各村の石高変化	23
楠浦村における石高半減前後の 年貢収納率及び年貢率	5
定浦の変遷	8
寺社領	9

万治検地による村高の変化 (単位:石)

	町村名		正 1 保 6 三 4 年 6	万 1 治 6 二 5 年 9	増 減 石	増 減 倍	鈴木さま
			(A)	(B)	B-A	B/A	
1	富岡町		37	176	139	4.76	
2	志岐組	志岐村	1,460	983	-477	0.67	
3		内田村	138	79	-59	0.57	
4		上津深江村	138	103	-35	0.75	
5		坂瀬川村	449	246	-203	0.55	
6	井手組	井手村	724	352	-372	0.49	
7		荒河内村	315	155	-160	0.49	
8		城木場村	326	176	-150	0.54	
9		上野原村	376	197	-179	0.52	
10		下内野村	420	248	-172	0.59	
11		二江村	339	146	-193	0.43	
12	御領組	御領村	1,378	859	-519	0.62	
13		鬼池村	698	456	-242	0.65	
14		佐伊津村	1,257	596	-661	0.47	
15		広瀬村	320	155	-165	0.48	
16		本泉村	91	105	14	1.15	
17		下河内村	130	195	65	1.50	
18		新休村	68	104	36	1.53	
19		本村	208	123	-85	0.59	
20	本戸組	本戸馬場村	919	767	-152	0.83	
21		町山口村	786	610	-176	0.78	
22		亀川村	351	251	-100	0.72	
23		食場村	94	173	79	1.84	
24		杵宇土村	194	200	6	1.03	
25		楠浦村	259	234	-25	0.90	
26		大宮地村	160	142	-18	0.89	
27		小宮地村	771	681	-90	0.88	
28		大多尾村	181	127	-54	0.70	
29		一町田村	1,022	600	-422	0.59	
30		中田村	134	96	-38	0.72	

	町村名	正 保 三 年 6	万 治 二 年 9	増 減 石	増 減 倍	鈴木さま	
		(A)	(B)	B-A	B/A		
31	一町田組	久留村	232	102	-130	0.44	
32		白木河内村	219	113	-106	0.52	
33		平床村	176	82	-94	0.47	
34		市瀬村	154	103	-51	0.67	
35		津留村	385	202	-183	0.52	
36		立原村	119	89	-30	0.75	
37		碓石村	47	64	17	1.36	
38		宮地岳村	545	275	-270	0.50	
39		今村	169	150	-19	0.89	
40		益田村	106	77	-29	0.73	
41	久玉組	久玉村	387	261	-126	0.67	
42		宮野河内村	326	192	-134	0.59	
43		深海村	166	126	-40	0.76	
44		牛深村	280	185	-95	0.66	
45		魚貫村	311	154	-157	0.50	
46		亀浦村	316	166	-150	0.53	
47		早浦村	98	85	-13	0.87	
48	大江組	大江村	1,008	364	-644	0.36	
49		今富村	453	189	-264	0.42	
50		福連木村	114	81	-33	0.71	
51		崎津村	69	16	-53	0.23	
52		高浜村	884	560	-324	0.63	
53		小田床村	206	111	-95	0.54	
54		下津深江村	173	60	-113	0.35	
55		都呂々村	114	194	80	1.70	
56		大浦村	438	302	-136	0.69	
57		志柿村	510	326	-184	0.64	
58		大島子村	696	463	-233	0.67	
59		小島子村	240	150	-90	0.63	
60		下津浦村	497	269	-228	0.54	
61		上津浦村	1,543	736	-807	0.48	

	町村名	正 保 三 年	1 6 4 年	万 治 二 年	1 6 5 年	増 減 石	増 減 倍	鈴木さま
		(A)	(B)	B-A	B/A			
62	栖本組	赤崎村	269	184	-85	0.68		
63		須子村	266	252	-14	0.95		
64		古江村	209	190	-19	0.91		
65		湯船原村	351	229	-122	0.65		
66		馬場村	289	199	-90	0.69		
67		下浦村	84	64	-20	0.76		
68		打田村	195	140	-55	0.72		
69		河内村	347	219	-128	0.63		
70	大矢野組	上村	1,324	665	-659	0.50		
71		中村	758	432	-326	0.57		
72		登立村	725	390	-335	0.54		
73		教良木村	473	360	-113	0.76		
74		内野河内村	339	202	-137	0.60		
75		今泉村	297	155	-142	0.52		
76		合津村	252	169	-83	0.67		
77		楠甫村	439	224	-215	0.51		
78	阿村	88	40	-48	0.45			
79	砥岐組	樋島村	70	72	2	1.03		
80		姫浦村	204	143	-61	0.70		
81		二間戸村	203	120	-83	0.59		
82		高戸村	142	137	-5	0.96		
83		大道村	177	93	-84	0.53		
84		御所浦村	131	49	-82	0.37		
85		浦村	151	144	-7	0.95		
86		棚底村	459	299	-160	0.65		
87	宮田村	208	238	30	1.14			
		計	33,174	20,991	-12,183	0.63		
		(註) 計	33,275	21,000			34	

楠浦村における石高半減前後の年貢収納高及び年貢率

村高見直し前 万治二年～延宝二年

年	西暦	村高 (石)	年貢 収納 量 (石)	村高 (A) 年貢率 (%)	田畑 (B) 年貢率 (%)	換算年貢率 (見直し後) (C) (%)	備 考
寛永十九年	1642	桑茶塩釜を含 めた村高(A) 392.30 田畑高(B) 260.74	62.3	15.9	23.9	26.6	全国的に飢饉
二十	1643		52.1	15.6	23.0	22.2	1
正保元	1644		89.8	22.9	34.4	38.3	大雨洪水・田方損耗甚大
二	1645		76.1	19.4	29.2	32.4	大旱魃・大不作
三	1646		84.4	21.5	32.4	36.0	
四	1647		100.7	25.7	38.6	42.9	
慶安元	1648		143.3	36.5	54.9	61.1	
二	1649		98.8	25.2	37.9	42.1	
三	1650		86.3	22.0	33.1	36.8	大風雨・田方損害甚大
四	1651		95.3	24.3	36.6	40.6	
承応元	1652		61.2	15.6	23.5	26.1	
二	1653		52.3	13.3	20.0	22.3	大風、潮害・田畑の損害甚大
三	1654		78.4	20.0	30.1	33.4	
明暦元	1655		78.1	19.9	29.9	33.3	
二	1656		85.4	21.8	32.7	36.4	
三	1657		86.3	22.0	33.1	36.8	
万治元	1658		66.0	16.8	25.3	28.1	大雨洪水
平均年貢収納量及び 平均年貢率			82.2	21.1	31.7	35.0	

注1 寛永十九年から万治元年までは、楠浦村及び立浦村別建てを両村合計で計算。

注2 年貢率(C)は、村高見直し後の石高で計算。

注3 寛永二十年は立浦村の資料無しのため楠浦村単独とした。(備考 1)

注4 備考の天候等に関するものは「天草近代年譜」より

村高見直し後 万治二年～延宝二年

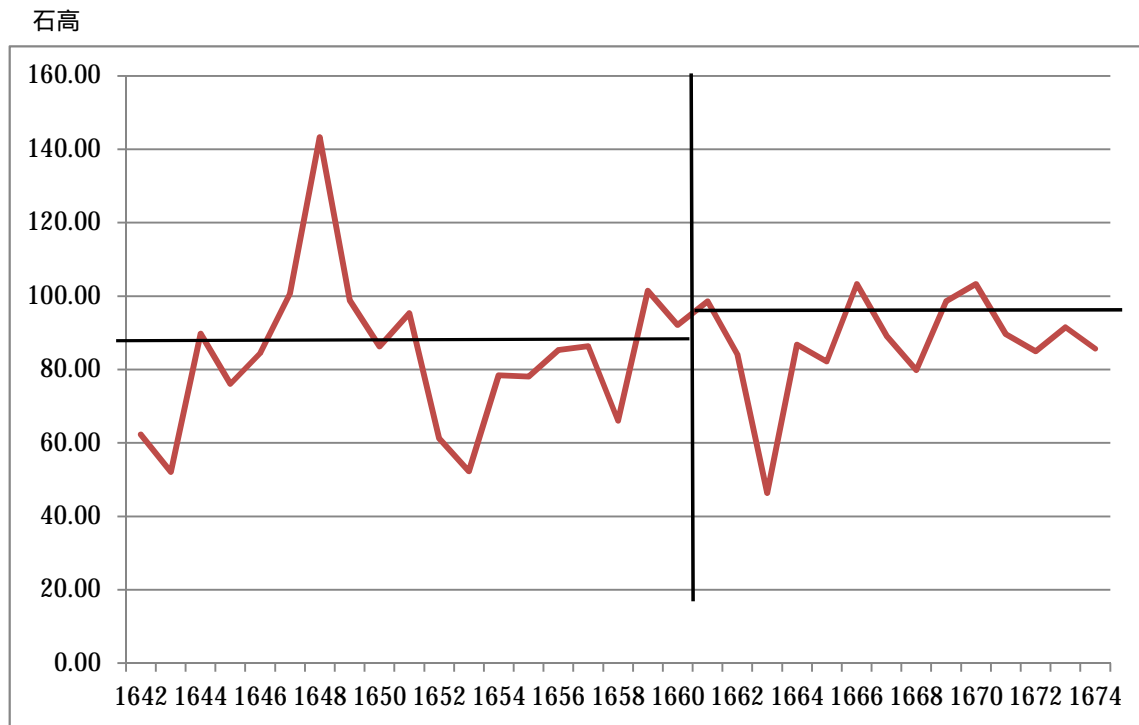
年	西暦	村高 (石)	年貢 収納量 (石)	村高(C) 年貢率 (%)	備 考
万治二	1659	234.65 (C) (田畑高のみ)	101.45	43.23	干天
三	1660		92.14	39.27	大旱魃
寛文元	1661		98.55	42.00	冷夏・大干天
二	1662		84.06	35.82	大雨洪水
三	1663		46.32	19.74	大旱魃・凶作
四	1664		86.82	37.00	
五	1665		82.13	35.00	2 大雨
六	1666		103.25	44.00	2
七	1667		89.17	38.00	2 大雨洪水
八	1668		79.78	34.00	2
九	1669		98.55	42.00	2大雨洪水のち旱魃・凶作
十	1670		103.25	44.00	2
十一	1671		89.64	38.20	
十二	1672		84.94	36.20	虫害・秋作大不作
延宝元	1673		91.51	39.00	
延宝二	1674	85.65	36.50		
平均年貢収納量及び 平均年貢率			87.72	37.38	

注5 万治二年より村高が見直された。

注6 備考の 2は、年貢収納量が記載されていないため、村高と年貢率から逆算。

原史料 宗像家文書、二次資料「鈴木重成とその周辺」、「天草鈴木代官の歴史検証」を元に作成

楠浦村に於ける 石高半減前後の年貢収納量 変化



— 年貢収納量 (石)

— 石高見直し後の平均年貢収納量 (石)
 前 1462 ~ 1658
 後 1659 ~ 1674

定 浦 の 変 遷

定 浦	指定年	1659年 (万治 2 年)	1856年 (安政 3 年)		備 考
		舸子	浦高	舸子	
富岡	1645	35	176	35	
二江	1645	17	4	17	
御領大島	1645	17	121	17	
佐伊津	1645	10	32	14	幕末、240軒、2100余の漁家人口 亀川浦から 4 人譲渡される
楠浦	1659	10	11	10	明治初年、140軒、700余の漁家人口
亀川	1659 ~ 1803	9	(25)	0	漁業活動が衰微し、高浜浦と佐伊津浦に譲渡し消滅・浦高()は1659年当時
大多尾	1659	5	5	5	明治初年、漁家人口約200人
大島子	1673・ 1715		0	5	疱瘡が流行し難儀の状態に陥っていた湯船原浦から前後2回、舸子役株を買い入れて定浦に仲間入りした。
大浦	?		0	2	湯舟原から譲渡される
湯船原	1645	12	9	5	
二間戸	1659	101	12	3	
樋島	1659		72	11	
高戸	1659		137	21.25	
大道	1659		93	24	
御所浦	1659		49	31.25	
棚底			0	5.5	砥岐組より株分けさる
宮田			0	5	砥岐組より株分けさる
中田	1659	7	5	7	
牛深	1645	44	185	37	
深海			0	2	牛深浦から分かれ親子浦関係
久玉			0	2	牛深浦から分かれ親子浦関係
宮野河内			0	3	牛深浦から分かれ親子浦関係
崎津	1645	31	16	31	
大江	1659	1	4	1	
高浜	1805		0	5	亀川浦から譲渡される
		299	965	299	

浦高は、斗以下切り捨て。したがって、合計浦高と合致しない。
太字は重成が定めた七か浦。

寺社領

宗別		寺社名	所在地 (現在地名)	寺領	寺社領地
宮社		飛竜宮	苓北町富岡	10	志岐村(苓北町)
		諏訪宮	天草市栖本町	7	栖本打田村(栖本町)
寺社	曹洞宗	円通寺	苓北町志岐		
		明德寺	天草市本渡	12	本村(本町) 内2石は明栄寺へ
		国照寺	苓北町志岐	45	年柄(内田村)及び志岐村 (苓北町)
		瑞林寺	苓北町富岡	15	志岐村(苓北町)
		芳証寺	天草市五和町	12	本村・御領村(本町・五和町) 内2石は同村薬師堂へ
		江月院	天草市天草町	10	志岐村(苓北町)
		正覚寺	天草市有明町	10	本村(本町)
		遍照院	上天草市大矢野町	13	本村(本町) 内3石は金性寺へ
		観音寺	天草市五和町	10	本村(本町)
		東向寺	天草市本町	50	本村(本町)
		明栄寺	天草市新和町	(2)	
		金性寺	上天草市松島町	(3)	
	浄土宗	寿覚院	苓北町富岡	13	志岐村(苓北町)
		円性寺	天草市栖本町	30	栖本打田村(栖本町)
		九品寺	天草市有明町	5	大浦村(有明町)
		崇円寺	天草市天草町	30	平床村(河浦町)
		江岸寺	天草市倉岳町	10	栖本打田村(栖本町)
		信福寺	天草市河浦町	5	平床村(河浦町)
		無量寺	天草市久玉町	10	平床村(河浦町)
		利明寺	天草市栖本町		
	真言宗	阿弥陀寺	天草市佐伊津村	3	佐伊津村(佐伊津町)
				300	

太字は四ヶ本寺